

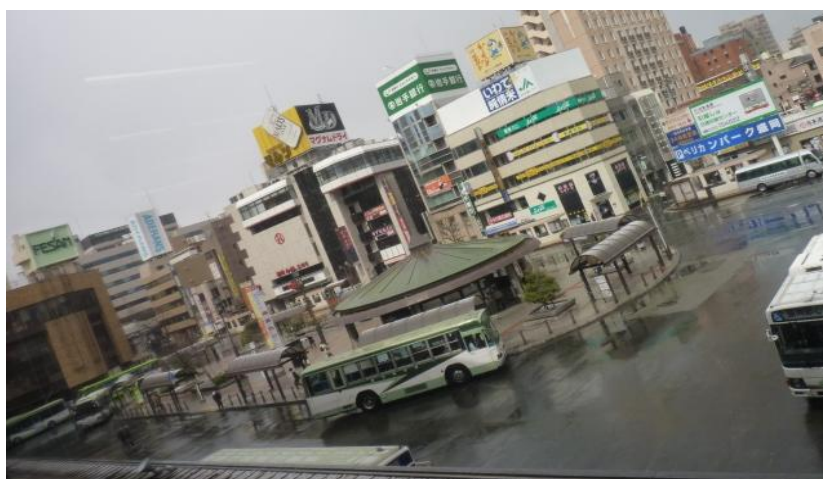
【2011 東北・関東大震災被災地報告②岩手の状況】

＜盛岡市の状況—岩手被災地復興の起点—＞



盛岡駅前から人通りの多いほとんどの通りで、あらゆる団体が募金活動をしている。興味深いことに、活動されている方々は皆、高校生を含め学生だった。ある高校生に話を聞いてみる。高校生達で募金運動を計画したところお金に関わる活動だと大人の責任者がついていないと許可されないとのことで、先生にお願いして活動開始したとのこと。

今回の震災で宮城県と同じく岩手県沿岸部が甚大な被害を受けていることは知られている通り。この盛岡と被災地の沿岸部には険しい山地が連なっているが、盛岡から沿岸の各主要地まで鉄道と自動車道が通り、久慈から大船渡まで岩手県のほぼ全ての被災地につながる起点となる場所として、被災地への訪問者と被災地からの避難者が行き交っている。鉄道は内陸の JR 東北本線が一関まで開通しているものの、もちろん沿岸部行きのはほとんどは復旧していない。



自動車道が復旧すると大船渡行きが 1 日 3 便、宮古行きが 1 日 9 便と、日帰りもできるように運行しており、現地の復興に一役買っている。地元の人曰く、盛岡から岩手県の沿岸地域を訪れる場合、平常時でも鉄道より高速バスの方が便利だったとのこと。

コンビニはパンやカップめんといった食料品は不足気味で、8 時には閉めるところも多いが、基本的にほとんどのお店が営業している。駅周辺には宿泊施設も

多いが、被災地から避難する人と被災地へ訪問する人で比較的混雑状況。松屋など、駅周辺から繁華街の大通りまで数件の飲食店が 24 時間営業。飲食店には「ただいま元気に営業中」という張り紙がよく出されている。岩手の被災地に入ってからやはり緊張感が増しているように感じるが、お店が営業している（つまり経済活動が再開している）という事実とこうした小さな工夫が、人々の気持ちの切り替えを支えている気がする。



<宮古市の状況①—街の印象—>

八戸の次に活動したのは岩手県宮古市。25 日から 26 日昼にかけて被災地域は暴風雪という情報がネット上で一時トップ記事になっていた。この予報で示された前も後も、ここでは雪が降ったり止んだり、強くなったり弱くなったりしている。暴風雪の予報に関わらず、盛岡 - 宮古間のバスは 1 日 9 便の運行を続け、どの便も上り下り両方ほぼ満員だった。



深い山間の 106 号線を走っていると、降り注ぐ雪と山々に積もった雪の白い世界が延々と続いている。どこからが雲なのかわからないくらい空気自体が白い。窓から眺める景色の美しさが忘れられないと同時に、宮古駅に着いたときに感じた突き刺すような寒さも忘れられない。

宮古駅前の風景ではそんなに被害が甚大な印象は受けない。観光案内の看板や施設が一際目立っている。もともと宮古は観光業が盛んだったこともあり、東

京から直通の夜行バスも出ている。状況が少し落ち着いたならこの地を訪ねてお金を落としていくのも重要な復興支援になる。

商店も品数や時間を縮小して営業再開しているところがあり、それなりの物資は手に入る。駅からすぐのガソリンスタンドは緊急車両限定で営業していた。改札前の立ち食いそばが食材不足からそばとねぎのみのシンプルなかけそばを特別メニューとして 250 円で売っている。このかけそばを食べていたビジネスマン風の 30 代前半らしき男性は、スーツを着つつも靴はゴムの長靴だった。



その理由は、すぐにわかった。

<宮古市の状況②—被害の実態—>



駅から海岸方面に数 10 メートル歩くと、さっそく八戸で最も被害の大きかった場所と同等の景色に変わった。泥や瓦礫の量からするとそれ以上にも思える。もちろんまだ回収の目途は立っていない。100 メートルくらい歩いたところで、被害の大きさを改めて理解した。

相当重量があるはずの漁船が住宅地に何隻も転がっている。沖合にあるはずのブイが電線に引っ掛かっている。電柱や信号が折れて倒れている。ほとんどの建物が倒壊した一画もある。倒壊しないまでも、ことごとく窓が割れている。

どの商店も営業再開までに何週間もかかるように見受けられた。八戸と比較すると、瓦礫の積み上がっている区域やライフラインが復旧していない区域の範囲が圧倒的に広い。地震で負傷した人を運んでいる救急車まで波にのまれたという。



駅前から海岸とは反対方向の地域でも、営業を停止している町並みがだいぶ内陸まで続いている。数件の飲食店では在庫のある限り営業を続けるとしており、ファストフード店やスーパーの食品売り場では一人の購買数量を限定している。とはいえ、建物の倒壊といった被害に関して言えば、海岸とは反対方向の地域ではほとんど日常の風景に近く、信号もつき、瓦礫が集められているような光景はない。市役所の方の話でも、地震の揺れによる倒壊よりも津波の水圧による被害の方が大きく、内陸と沿岸で大きな被害の差があるという。



<宮古市の状況③—現地の取り組み—>

ほぼ全ての商店が営業停止状態になっている地域を歩いていると、フリーマーケット的なサービスが組織的に行われているのを見つけた。いらなくなった服や靴を市内の人から集めて、若干泥が付いたままのものも含めてクリーニングせずに、それぞれ 100 円で販売している。様々な作業で泥まみれになるのだから、きれいである必要はない替えの服や靴を必要としている人は多い。供給側も、瓦礫となった家から掘り出したものがゴミになるよりはよほどいい。無償の支援物資と異なり経済活動としての側面もあるため、運営主体となっているスーパーマーケットの営業再開にも貢献している。

駅から海岸側の一体ではほとんどライフラインが復旧していない。主要な交差点では警察官が数人がかりで手信号を続けている。昼間の明るい時間帯に避難所から自宅付近に戻り、瓦礫の除去作業に励む方が多い。一体どこからやってきた何の物体なのかもわからないやたら重い鉄くずを移動させるのに一苦労。お年寄りの方だけで家の瓦礫の整理に取り掛かっている姿がよく見られる。まだ市外からのボランティアを受け付けていないが、人手の需要は非常に大きい。入江から内陸に伸びる川まで行ってみると、高さ 3 m はある堤防が、強大な津波の跡もヒビ一つ入ることなく川沿いにそびえている。強度も高さも、この町の津波被害に備えた管理が特別不十分とはとても思えない。



3 月 21 日から宮古市の被災者向けに災害情報の臨時放送、みやこさいがいエフェムがスタート。宮古市街地から宮古湾岸部までの地域で周波数を 77.4 MHz に合わせると聴くことができる。この放送のチラシがバスの待合所や

再開している商店など市内の人の目につきやすい場所に置いてある。内容は給水炊き出しの具体情報だけでなく、全国からの応援メッセージや、物資の入荷状況など。

盛岡に帰るバスを待っていると、それぞれ初体面の人が自分たちの状況を語り合っている。自分の番になって、正直に東京から来たことを告げると、「また少し落ち着いたらゆっくり遊びにおいで。」といろんな意味で想定外の返答。それに対して気のきいた反応ができなかったことが、少し悔しかった。



文責：東 桂太